四方晴墨帖　全

老師未生翁の箇居(?)華術(?)之老(?)れ(?)書(?)を毎
百箇條の口授我(?)流(?)の孫(?)四季(?)子文(?)て祝(?)以(?)日乃
挿花(?)古(?)ん作意明(あきらか)にせらるよふし垂(?)梗(?)しり
口授のまゝあらまさ(?)く其容儀(かたち)を未(いまざ)図にあらはさ(?)ゞれ
予親(まのあたり)未生の流れを浴(よく)しぬるは是をもて四方に
拵(?)ひ折にふれ人をして此書(?)を綴(つゞる)(?)
日数よ(?)續(つゞき)(?)けり時花や葉や時に随(?)して
行(?)儀(ぎやう)(?)…八たちや歩(?)…

寫し絵つゞくその數も三十六(みそぢむつ)に満る
是絵ハ梓(あつさ)に登し二冊畫帖となし
四方乃華へと題せしハ文化十とせ餘り
又とせの春

不獨齋

庚甫

節分の花
ほうき
小梅
竹都
古室安拾甫

元日の華

若松七本

眼籠

同都
節齋延甫

二日の姿

切竹

同都
廣安汝栄甫

三日の義

白梅

同都 松古齋景甫

七種の花

梅にかぶら

南勢竹都
廣雲斎周甫

上元の美
梅
柳
椿
南圯黒ゝ浦
廣林齋閑仙甫

上巳の花桃

同列名高浦
廣豐挿祐甫

紅薊

石陸をとりけて

水沢瀉

同品南部浦

一天斎指月

火

地

水

是より七種餝附

獅子口

ていかかつら

同所 廣涼祢友月

寸渡

ひなん草

同所
古谷氏麻女

鮟鱇

そらん
せきちく

同所
春好斎宋甫

手拵 きく 百合

同所 廣圓齋邦美

二挃

芍藥

同所

廣掟訡泉月

橋抗

かきつはた

同処
花葉齋 昌甫

二重切
とこ根ちうさ
きあん草

右七種
餝りいけ
縫

同処
白蓮齋笑甫

是法寺庵

かうほね

同所 生涼齋旭甫

入船菊鉄線

同所
滋晩斎周幽月

端午の姿

花菖蒲ニ

葉志やうふ

同列黒ゝ浦

廣顯齋有甫

七夕のむ桔梗うるかや
とこゝろめし
新宮府
松見斎九甫

新宅の花

みづあをゐ

同処
養意軒一瓢

井筒隅釣瓶
萩
杏
仙翁
同府
委心齋 通之甫

中元の姿

竹

みそはぎ

同列 黒ヶ浦

廣流 齋用 者甫

八朔のな青葉附

善器ニ

八朔

なし梅

熊野尾鷲　廣源社流甫

同
陰乃つるへ
同
廣艶斎秀甫

重陽の姿さく

同社
廣栄斎松甫

白

黄

朱

移し乃姿

猫やなぎ

同 長嶋

夕龍斎斗甫

寒ぎく

元服の姿

白玉椿

門弘 無端斎環甫

入院の華

梅
とくさ
をもと

同社
廣夢斎現甫

かゝり船
梅
円勝浦
圖南秋歩甫

逆船
いわきゝさく

同所津浦
廣有斎休甫

冬至の華

梅さくしや

同所
廣生斎速甫

寒きく
三點齋

追善の華

かれき

柳

椿

泉南貝塚
兎月斎圓甫

延生の姿

ひめこまつ

泉南貝塚

一司軒百甫

竹

こぎく

厄年祝の義

志ら菊

不濁斎廣甫

飡遊用四季草木正二月之部

白梅・紅椿・青柳

遊会椿せんてう金丁花　万年青

藪小路　荷葛　菜花

紅梅

遊会　芭蘭　葉牡丹　岩蕗

一葉又ハ赤椿　獨芦せんてう

桜

紅牡若

苔葉てう

短きとり見ハ

薄廣口ニ石をかさり揷て但し居物ニ紅梅を

揷木陸ワリて遊会てう

正月室咲物

彼岸桜・桃・山吹・連翹・黄梅・サンシユイ

右室咲ハ一色揷て見べし但し二三重切ニ揷る時ハ

梅柳のあしらく物を用ゆ

常盤草木

其時節の草花但しきやうれ

なり取あわせ合て四季と用

五葉松

竹・圓栢・椶葉・栢槙・椹・猿猴杦

糸すゝき・観音柳・錦木・芭蕉・シユラウ竹

絡石・蔦・蔦照葉　船ニ撫てたゝ連ニ云おと　帆むニ用柳子口ニ重切

エニミタ合如前

木賊・芭蘭・熊竹蘭・岩路　あらい薮小路　筒嵩葉花

ホヨ撫てち　あらい同よ

モウソウ竹ニ笋　連合椿センリヨウ　ととや

二三月之部

海棠・楓・梳・杏・蘋枋・木蓮　連合石楠ニある　但し胡蝶花

手毬花(てまり)・小手毬・李・接骨木(にハとこ)・雪柳

桜桃(にハさくら)・梢梅(まむめ)・イスラ梅 通合 胡蝶 苧環(ヲダマキ)つま 石竹 金盞花

酴醿(ヤマフキ)・黄梅・連翹 通合 くさ中

鳶尾中(いちはつ)・紫蘭(しらん)

金鷄蘭(きんけい)・華鬘草(けまん) とのく 一色挿てし ● 櫻 一色挿て宜しく 秘て傳あり

三四月之部

牡丹 一色にて挿へし 傳花多り

藤・カク草・下野(しもつけ)・罌粟(けし)

草下野・芍薬・百合 色にても 黒百合ハ客席不用 各一色挿てよし 又ハ通合ありても

常盤梅ハ種ニ遊合 草花色々

花以栗

蘆ハ遊合牡丹も河骨 一色挿る二六秘て傳あり

四五月之部

卯の花・小箱根卯花・南天・観音柳・

夏黄梅・ゑみゝ花・エニシダ・レダマ

白鳥花 各々色ある物あれハ一色斗ても 遊会寄る時ハ取合

栢葉ハ遊合ハ鳥もち下野 其外草花何ても

萬菖蒲・蘐實珠

葵・岩蘭・菖蒲・萱草・松元仙翁

薬牡丹芸・万歳青苞 進呑石斛
昭由り金銭芸

真竹ニ筝 進み百合
菖蒲ニ江あさき ● 琢芸 蓮 小蓮一編揃二八
秘て傳あり

五六月之部

夏ぎく・五月女郎花・檀毒・羽衣草

瑠璃しだれ・帚の尾・仙翁・雁皮・瞿麦

桧あふぎ おのく一色揃てよし
進呑八見斗ひ

熊谷蘭

莬麻・濵万年青 おのくものにちれハ一色にてもよし 小菊添ひ願ひ仙の子目ゟ草花かにこ

車前子・さ象苑の葉 通合花行 むちくき合せむ

角木賊 あらい かまやま合

夏かれ・白萩・蕣 柳子口にて八一色いけてよし 船二重切にてハ右車からる花ハ合

白木槿・ひやう葉柳・金糸梅 おのく一色 挿てよし

常盤草木 なし

秋草色く有

六七月之部

桔梗・女郎花・男郎花・女良花

ワレモツカウ・萩・鴈來紅・辨慶草・秋海堂

烏金蕉　各一色にてもよし　あしらひ見計ひ

竹　追合　さくら女郎花　三分草なる中行にても

澤桔梗・水草色く・水葵・沢瀉

七八月之部

菊・紫苑・薄・ヽかるかや　なからへ小さく　おん菊あづまきく

濱こさく

時鳥草・金萩・水引草・三蘇　一色にても　追合　一文中

芭蕉蘭・木賊　合　あやくさ小菊　つなかつ合

河骨

冨久蘭 合多陸を多て野ミく家中金荻

八朔梅・同白玉椿多く残きく・薄三種柳秘て付ねり

ち梅嬢・猫柳

八九月之部

菊・蘭・山岩落ち・井三栗・篠輪冬

枇杷・茶花・錦木・實むら咲合へ斗ノ

蔦かつ 添おふきく 篠輪冬

茶冬牡丹・同冬仙

九十月之部

紅葉（もみじ）一色にても生ス 秘て傳有

南天・梅嫌（むめもどき）・蔓嫌（つるもどき）

センリヨウ・縮沙（しゆくしや）・蘡薁（をとも）をはし寒菊あれハ一色にても合兄弟

山茶花・總柳（こごう）色々

霜月迄用

合 寒菊 篠りんどう

富久蘭 冬陰をうけく合 さつまんふ水仙

十一十二月之部

冬牡丹・同椿・冬至梅・寒菊・水仙

寒梅（み）色々・柳（やなぎ）色々・絡石照葉（ていかのてりは）

蔦てつし素用
常盤の緑留め　梅嫌水仙の素　赤小さい

水仙（葉なし）　寒菊（なでしこ）　錦木（センリヨウ）

右七種に順して取合勘考有べし

希も同志の友を得て右草木挿揚の秘伝様々に

登して不朽に傳ん事をや

四季草木養

此家の秘傳に諸（もろく）の草木を養ふ事ハ其の

然間用ひ其四季陰陽消息相生に従ふ也

去る剪伐したる草木を養ひ生れし性氣を
ゑもたしまる事一年せ哉真の草と三分ほして
其時候に應じ養をほどこし其時候にハ
夏より秋迄是大陽にて陽中陰の時
なれハ草木中に陰氣を含めて人間を始め
草木禽獣虫に至る迄悉く病むものなし
剪伐したる草木ハ陰氣含む事甚し
是故に活挿ったる人ハ疵を求めて毒氣を請

たるが如し毒に寒無則陰なれバ右に伐くる所
偶まて冷気ふひを毒口に就ハ陰は陰を合すると
所家巻に形ら毒漸く性氣衰ひ甚体
乱て神佛へ供し神祭に用ひ人心哉
巻ふするし字家ハし神草木を業ニ
京毒ありて諺なきよあらすや故に巻を
與へ一と發せハ伐り山る偶ゑて至る物肥
根を甕湯の中へ入さかして熱て全體に

陽氣はたゝちに地の家に根を治め水へ達す十二時
余は已に挿花の事を記す是は真の要に
行乃時候にて春分より夏至迄亦然なり
冬至まで此安度無て次陽より陰の時として
暑寒にしたかふ陰陽常なりして人体も
やゝもすれは形を外の活物草木に至る迄
病む事すなわち形も失ひ草木を伐るに無く
其時陰氣は含む故に是は養ひとして無事

其物の根を炭火の中へ入火にあぶる迄とゝめ
焼草木の中を暖めたし如く陽氣をたもち
一夜ほと冷水へ漬け三時乃余過て摘乾に
是ハ草是緑の養ある草の時節也て
冬至より春分まで是大陰にて陰中陽
の時節なれハ萬物中に陽氣を含が故に
病を損ずる事多し されハ草木を
米参ひ并に代ゆる像して根を水ゐへ漬けて

三時余にして摘むは枯草の如くなり
陽気の絶ゆる事のごとし寒残じ茶之事故ハ
夏ハ甚しくて熱燥したる食物ハ損しれと云
時として一度暖(あた)めて湯気をかくすれバ損する事
なし　まず損(そん)したる食物にても能(よく)洗(あら)ひて干(に)し
かくむまもして百毒(どくせ)浅ふるとも なんぞ損(そん)ずるを
あふれまじ 陰を諸(しょ)くの物を損(そん)するが故に毒なるべし
右騰(とう)ハ一切の養(やしない)天地自然(しぜん)陰陽消長の往来

を勘考ありて四季の季候にしたがひ
草木ヿ養ひほどこす事支柳菓家の
勘要なる所なり

附り　四季風の論

夫北風ハ悴しく吹ばハ萬物を養ひ静よ
吹ども害（がい）ある理なり是北ハ陰中陽乃
方なれバなり東ハ陽の方なる故也
東風（こち）ハ気物に潤（うるほ）ひ弥増して葉なり

南風強く吹ハ害し弱きハ益ある理あり
是南ハ陽中陰の方なれハなり西ハ
陰の方なる故に吹風萬物を生して
毒なれハ養ひたる草木に毒風成
あらぬやうにおもふへき事なり
左に記す草木無養秘て傳あり

一竹養真行草三通

一同青葉附船自在竹又ハ垂撥ニ用

一同青葉附花器なく

一同即挿　伐りたる後にても數日を持ッ事

一朝皃の蕾開たるまゝにて夜に入ても生々たる事

一河骨葉之行草三ッ通　水草何れも

一蓮葉之行草二ッ通

一蓮即挿　伐りたる後にて數日持事

一雨中の景色柳　數多の枝より露の落る事

右者傳執心輩ニ及傳授事也

るおしもたち帰りぬつの年
ともこゝろ志魚を増補してそ
すゝびをつしを清りし事
偏に亡先生老師のかけるゝ事ば
思ひあるゝ事

師の薫里
家にう津して
志をし海の
忠れたしもとく
色へ花の香

廣甫

善哉觀小寫の事にて人の國ハ此所なりとも倭し海
孫なる中川よりて上宮太子忠佛の法を弘め給ひしおりから
佛の慈恩を報ずるにハ香華燈明を惜しまず口よりハ佛乃
御名を唱へしと志ゝのしるし椎坂の北の邊にて神前
臣の魚鳥の熱物を奉りしにも不浄の物をきよめさせ
宮中にて出すを止し唯萬の菓子色あざやかなる草木の
花をまいらせよと書しの給へし夫より此宮儀
ありて従ふもとれ人の古き社のみ通ましつ石上舊き昔ハ

さも有しハあまも千賀ある塩竈迄もよく写てハ挿花乃
流も八十瀬よ分れそのうまにし台鏡其林の友なるうに
蘭や菊や其品さ成寧成しに別人あり其得拙ら中に
未生家のなつるは是なり草木を出でてそ花器を
撓し曲る枝を撓直しいともさかれる花葉ハ去り虚実
等しき理を備へ弘法三才の容儀をうつし自人倫乃
禮節よしも及ばして其の跡を踏迷ぬ詞のをしへを
志ろも論されしハあやしくも挿花の妙所を六未生家

獨得(ひとりえ)ありと云も可也と云人も可なる然共其故ありて
香哉とめて門に入人多かりし中に毎に此不濁齋(このふだくさい)の
翁(おうし)ハ東生の高き人とや華あまて去年(こぞ)此比苔(こけ)の
都(みやこ)出て跡(あと)さむし八伊勢に團(まどか)し遊邑しつ素(もと)の行
好(すけ)る道ハ奈も捨ハ彼面(かのも)此面(このも)の好士哉集(つど)へ新玉の年立
三川の始(そめ)の日松や梅哉うぬとしもて四季(しき)の遊(すさ)びの撰(えら)ぶ
なる哉なへの日花の入哉三十六乃(そむつ)歌に寫(うつ)し奥さや
まこと哉これ此道よ心を志すなる人のうね學(まなび)の

志ほりふかくてそも象戯揮よ彫せやつるふつほの
石婦莫一筆加へよとあらめ神祢のか筒井丸蛙手自ゆり
處せき縦ぬし二亭花の品々を戯に志しばあはずの
いともく拙けれバ姓をしにぶといいふ船乃いふとついふこ
つきどいたゞし責まバいなげきて結目白経ぬらん
案戯かくしてもえ悋つるゝ侍あるぬ

文化十とせ餘りひとゝせの春　異世能堂演居

此冊子を撰り請て花書に
志るされきつらねき我名も四方よ
薫らんことをよろこふし

難波津ゟ
蕉北見物望
いせ左久良

癸未のとし
仲春

青影
蕪村

文化十五戊寅春

浪花未生家
不濁齋先生著述

畫工
仙臺
森　楚年

勢陽洞津
青々軒竹甫藏版

彫工
同
山田
阪本屋定七

本製
同津東町
山形屋東助